

上北山村

～大自然の魅力を活かした観光立村を目指す～

奈良県南東部に位置する上北山村は、総面積の97%を森林が占め、林業を基幹産業として発展してきました。林業の衰退とともに村の活気は徐々に失われ、人口減少・少子高齢化への対応が喫緊の課題となっていますが、村を取り囲む大自然が「世界文化遺産」「ユネスコエコパーク」「日本遺産」に認定されるなど、観光には大きなポテンシャルがあります。現在村では、住民と行政が一体となり地域経済活性化や関係人口創出につながる新たな施策を展開しています。

I 概要

1. 地理・歴史

上北山村は県南東部に位置する人口512人（県内39市町村中38位）、世帯数270世帯（同38位）、面積274.2km²（同4位）の村で、面積の割に人口が少なく、人口密度は県内の市町村では最も低くなっている（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015年））。

かつては「北山郷」と呼ばれ、江戸時代には将軍家の御用材所として中央政権に材木を上納するなど、林業を基幹産業に発展してきた。町村制が公布された翌年の1889年、北山郷上組4か村（河合村、小椋村、白川村、西原村）を以って上北山村が設置された。

現在は役場、郵便局などの生活拠点や道の駅、ホテルなどの観光拠点が立地する河合地区が村の中心で、川沿いに点在する小椋、白川、西原の各地区と合わせ、4つの集落から構成されている。

東に大台ヶ原、西に大峯山系の山々に挟まれ、総面積の約97%が山地で、平地が極めて少ない地形となっている。村の中央部を南流する北山川に沿って国道169号線が縦貫しており、北は川上村方面へ、南は下北山村方面へと通じている。西は天川村方面に国道309号線（冬季通行止め）が通っているが、その他の隣接する五條市、十津川村、三重県の大台町、紀北町、尾鷲市、熊野市に直接通じる道路はなく、東西方面への交通ルートはほぼない状況となっている。

公共交通機関は、民間バス会社と県南部地域連

携コミュニティバスが大淀町から大和上市駅を経由し運行しているほか、村内のコミュニティバスが集落間を運行している。もっともいずれの交通手段も1日1～2便の運行で、村内外の移動は自家用車頼みとなっている。

2. 産業構造

就業者人口（15歳以上）の産業別割合を見ると、第1次産業が7.8%、第2次産業が25.0%、第3次産業が67.2%と、奈良県全体（順に3.4%、22.2%、74.4%）に比べ、第1次産業の割合が高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。第1次産業はほとんどが林業、第2次産業は約8割が建設業、第3次産業は公務の割合が最も多く約2割と、山間の過疎地としての特徴がある。林業経営体の数は3経営体と多くはないが、保有山林面積は4,820haと県内39市町村中3位で、1経営体あたりの所有面積は同1位となっている（農林水産省「農林業センサス（2020年速報）」）。

民営事業所数は74か所（県内37位）で従業者数は247人（同38位）。事業所数、従業員数ともに建設業が最も多く、その他は小売業、製造業、宿泊業、林業などで、ほぼすべてが小規模事業者

上北山村の位置図



となっている（総務省・経済産業省「経済センサス・活動調査」（2016年））。

3. 人口構造

年齢階級別人口移動を見ると、15歳～19歳の転出超過が著しく、20歳代に少数の転入がみられる。これは高校への進学を機にほとんどが一旦地元を離れ、その後学校の卒業などにより一部が地元に戻ってくることを表している。雇用の場の創出が課題となっていることが、人口移動からも読み取れる（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015年））。

II 村の活性化に向けた様々な取り組み

山室 潔 村長は、2020年12月に2期目の再選を果たした。人口減少・少子高齢化の大きな流れは変えられない中、元民間人ならではの発想とスピード感で、村の経済的自立を高めていくための施策に取り組んでいる。

1. 観光立村に向けた取り組み

○「フォレストかみきた」がオープン

2020年6月1日、上北山温泉ホテル「フォレストかみきた」がオープンした。当初は5月中にオープン予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で1か月遅れのスタートとなった。



上：フォレストかみきた（外観）
下左：フロント・ロビー、下右：レストラン「森人」

コロナ禍での船出であったが、旅行者から3密が回避できる宿泊先として支持され評判は上々。温泉の泉質や地元産の食材を使った料理、ゆったりした客室などが観光客から支持されている。また、奈良県の「いまなら。キャンペーン」により

奈良市内など北和エリアにおける認知度が向上、コロナ禍でのマイクロツーリズムの需要を獲得している。

遡れば観光振興に向けた周辺地域の開発は、1991年に奈良県の事業として総合案内センターと日帰り温泉施設が建設され本格化した。1993年に総合案内センターが道の駅に指定、また1994年に宿泊施設「ふれあいの郷かみきた」が落成するなど周辺施設が形成され、観光の核、さらには住民の交流の場として期待された。しかしながら国道169号線の崩落事故による通行止めなどもあり客足が遠のいたことで指定管理者が撤退、「ふれあいの郷かみきた」は2011年に閉館した。その後1度再開したものの1年足らずで閉館していた。

一方で世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成エリア「大峯奥駈道」、「大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク」、さらには「日本遺産・吉野地域」といった観光資源に恵まれる中、これまで宿泊需要を支えていた民宿等の宿泊施設が経営者の高齢化や設備の老朽化などの理由で減少していった。そこで2016年から観光施設の集約・再生事業に地域をあげて取り組み、2020年「フォレストかみきた」のオープンとなった。

今後の同村の観光立村施策の柱として、また村内の貴重な雇用の場として大きな期待がかかる。



大峯奥駈道 心の道ウォーク（イベント）（左）と道中の花（中）、不動滝・銚子滝（右）



大台ヶ原（左：東大台 正木峠、中：日出ヶ岳展望台、右：西大台）

○和佐又山周辺の再開発

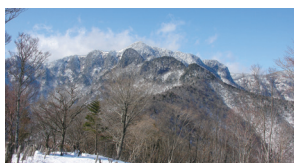
和佐又山は大峰山脈の大普賢岳から東西に枝分かれした尾根に位置する標高1,344メートルの山。山頂からは大台ヶ原、八経ヶ岳、国見岳、行者還岳が一望でき、ハイカー入門者からベテラン

登山者にまで人気がある。

その中腹にある和佐又山ヒュッテは登山者の宿泊施設や林間学校、合宿等で利用されてきたが、老朽化に伴い2019年11月末で閉鎖している。これまで周辺登山のベースとして、また登山届の管理施設として重要な役割を果たしてきただけに新たな施設を望む声は多く、村では新しい施設の建設やオートキャンプ場の整備など、周辺エリアの再開発を計画している。



和佐又山ヒュッテ



和佐又山から眺めた大普賢岳

○自転車の聖地を目指して

2001年から開催されている「ヒルクライム大台ヶ原」は、村内の河合地区をスタートし大台ヶ原の麓から標高差1,240m、距離28kmを駆け上がる自転車レースで、毎年800人近くの選手が集まる（2020年は開催中止）。

同村では村ならではの景色、歴史を感じることでおすすめコースをサイクリングMAPとして紹介し、コースの随所に自転車スタンドを設置している。また「フォレストかみきた」には自転車の洗い場や整備場などの設備があり、村をあげて「自転車のりに優しいむら」、さらには「自転車の聖地」と呼ばれることを目指している。



ヒルクライム大台ヶ原



フォレストかみきた内サイクルヤード（自転車の整備場）

○特産品の開発

同村では大自然に育まれた素材を活かした名物、名産品が生まれている。

とち餅はとちの木の実を昔ながらの製法で餅に加工、甘さを抑えた自然の味わいが人気となっている。溪流の女王ともいわれるアメノウオ（アマゴ）は、村内で養殖され宿泊施設などで提供され

ている。またコンニャク、吉野鹿・吉野猪など、自然の恵みを活かした品々が並ぶ。

これらは「大台ヶ原物産店」や道の駅「吉野路上北山」、「フォレストかみきた」の土産物コーナーなどで販売しており、村の事業者の貴重な収入源となっている。



とち餅



アメノウオ（アマゴ）



コンニャク

2. 林業の振興（復興）に向けて

同村の民有林面積は24,255haで、そのうち人工林の面積は9,541ha、人工林率は39%となっている。大台ヶ原や大峰山脈を中心に天然林が広がっており、奈良県南部・東部の市町村の中で人工林率は最も低くなっている（2018年度奈良県林業統計）。

同村はかつて吉野郡の他地域と同様、杉・ヒノキの造林が盛んに行われ、その多くが伐期を迎えているが、所有者の山離れ等で放置森林が増加している。そこで国土保全のための計画的な伐採と間伐材・端材の利用が課題となっており、2013年10月には特定間伐等促進計画を樹立し、森林施業の共同化、森林GIS活用による森林情報の収集などを推進している。

国産材の需要は低迷しており、基幹産業としての林業振興の道筋は多難ではあるが、間伐材・端材の有効活用など森林循環を意識した取組みは徐々に浸透している。

吉野杉の間伐材・端材を使用している高級杉太そげ箸「吉野の杉箸」は、一本一本丹精こめて作られ、独特の香りで人気を博している。



大普賢岳遠望（天然林）



吉野の杉箸

3. 将来に向けての布石

○多世代が集うふれあいの^{まち}郷づくり

同村の喫緊の課題は、過疎化・高齢化がもたらす負のスパイラルを食い止めることにある。人口減少による地域経済の低迷は、雇用機会の喪失や住民の生活基盤の低下につながり、それが人口減少をさらに進展させることとなる。

そのため、観光客の誘致を村の賑わいづくりや雇用の創出につなげることで、地域経済に好循環をもたらすとともに、地域のつながり・住民相互の助け合いなど地域活動を創出するための施策が必要となる。同村は、奈良県との包括協定に基づき、村の中心部である河合周辺地区の活性化に向けたまちづくりに取組んでいる。

現在河合周辺地区は、国道169号線沿いの道の駅「吉野路上北山」を中心に、主に村外の観光地に向かう通過・休憩地点となっているが、地区の魅力を高め来訪者が立ち寄りたくなる空間とすべく整備を進めている。「フォレストかみきた」のオープンに続き、水辺空間の整備や道の駅周辺の駐車場確保などの施策が検討されている。

また旧小学校跡地の「とちの木センター」には交流室や図書室、シェアオフィスなどがあり、交流の場となっている。



道の駅「吉野路上北山」



「とちの木センター」での交流の様子

○関係人口の創出

コロナ禍では、3密回避を目的に都市部から地方への人の流れが出てきた。都会から離れた山間地である同村にとって、移住・定住施策はややハードルが高いが、特定の地域と継続的につながりを持つ関係人口の創出は、持続可能なまちづくりを進める上で重要な施策である。

「一般社団法人ツーリズムかみきた」は、持続

可能な雇用の創出と観光振興・産業振興を目指して同村が設立し、現在「フォレストかみきた」の運営主体となっている。多彩な経歴を持つ村外からの移住者が多く携わり、情報発信にも長けている。また、大台ヶ原を歩くツアーやワーケーションのモニターツアーなど村の魅力を紹介する活動を精力的に行っている。

「一般社団法人がんばんらえ！かみきた」は、村民が組織した地域活性化を目指す団体で、地元の新鮮野菜やパン、雑貨などを販売する「かみきた山のめぐみ市」を定期的に開催するなど賑わい創出に寄与している。



かみきた山のめぐみ市

また観光情報などを村民ならではの視点で発信している。

これらの取組みは、観光で同村を訪れたことのある「交流人口」を「関係人口」として獲得するきっかけとなり、その人たちが様々な角度から村の活性化に貢献してくれることが期待される。

山間部の過疎地である同村にとって、人口減少・少子高齢化は抗うことのできない流れである。一方で生物多様性のある天然林に恵まれた大自然は魅力的で、多くの人々がリピーターとして訪れる。

コロナ禍では都市から地方に向かう新たな人流が生まれている。また観光においてもマイクロツーリズムが潮流となる中、京阪神や奈良県内から吉野地域を目指す動きが出てきた。新たな観光拠点が稼働するなどインフラ面が充実してきた今、その流れをうまく取り込めば同村の活性化への期待は高まる。

「村民に住んでよかったと思ってもらえる心安らぐ風景を作りたい」との村長の熱い思いから、昨年、河合地区の耕作放棄地にアンズを植えた。大自然とアンズを原風景として持つ村民が、村内で生活の糧を得て定住していけば、村の賑わいも継続できるもの考える。（秋山利隆）